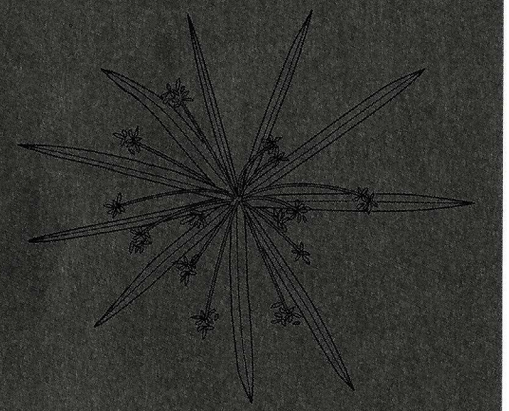
生きもの博物誌

【カヤツリグサ】
ラオス



カヤツリグサでゴザ作り

小坂 康之
（こさか やすゆき）

京都大学東南アジア研究所非常勤研究員

ゴザで接客

ラオスの農村で家々を訪問すると、ほぼ決まったかたちのもてなしを受ける。まず床にゴザを敷いてくれる。それから、おもむろに歓迎の杯が差し出される。このとき、日中ならば、高床式家屋の床下でくつろぎながら、強い陽差しをやり過ごす。夕方以降は、狭くて急な階段をおそるおそる上がって、家のなかにお邪魔することになるだろう。床下でも家のなかでも、ふだんは折りたたまれているゴザが、訪問客のために上座を創り出す。

ゴザを使う習慣は、ラオスに限らず世界中に広く見られ、その用途もさまざまである。床の敷物としての利用はもちろん、部屋の仕切り、家の屋根、ボートや荷車の覆い、また戸外で農作物を乾燥させるときに用いられることもある。さらにアマゾンやボルネオのロングハウスでは、床に敷いた一枚のゴザが個人の空間をはっきりさせる手段のひとつになるという。

厄介物を逆利用

ゴザの材料には、丈夫でしなやかな特性をもつ、植物由来の多様な素材が使われている。例えばラオスでは、カヤツリグサの仲間、クズウコンの仲間、パンダナスの葉、カジノキの樹皮を用いて、さまざまなタイプのゴザが作られている。これらのなかで、もっとも主要な材料とされる、カヤツリグサの仲間を用いたゴザ作りを見てみよう。

カヤツリグサの仲間は、どこにでも生えている「厄介な雑草」だ。村のまわりの林地や畑地、水田、水辺に、それぞれ異なる種が生育しているが、どれもよく似た容姿をしている。しかし、ぼんやりしていると気付かない各種の特性を、村の人たちはよく知っている。ゴザの材料として一般的に使われるのは、プー・ナー、プー・モー、プー・イトックの三種類である。プー・ナーとプー・モーは、水辺に自生する。プー・ナーは川沿いの低地に見られ、もっとも大きくて一・五メートルほどである。プー・モーは深い沼に群生し、二メートルちかくまで育つこともある。これら二種類のカヤツリグサは、乾季初めに稲刈りを終えたあと、水位が下がってから刈りとられる。一方でプー・イトックは、庭先の池に植栽される。一・五メートルほどに伸びる真っ直ぐな茎は、雨季と乾季に一回ずつ収穫される。

刈られたカヤツリグサの茎は、陽にあてていったん乾燥させる。そしてゴザを織る前に、数分のあいだ水に浸して柔らかくする。模様を織り込むために青や赤の染料で染めることもある。ゴザの織り方は、基本的に機織りの原理と同じだ。縦糸として細い紐を張り、横糸としてカヤツリグサの茎を一本ずつとおす。慣れた人ならば、一日に二メートルも織りすすむという。

農民にとって、カヤツリグサのような丈夫でしなやかな特性をもった雑草ほど手ごわいものはない。しかし、そんな厄介な特性を逆に利用してしまうところに、ゴザ作りのおもしろさがある。一本一本に手をかけて丹念に織り込むことで、厄介者は、接客にかかせない道具へと生まれ変わるのである。

川沿いの低地に自生するプー・ナー（乾季の様子）

プー・イトックの植栽用の根茎

庭先の池に植栽されるプー・イトック

カヤツリグサの茎を１本ずつ、添木を使って縦糸のあいだをとおしていく

ゴザ織り専用の道具が用いられる

カヤツリグサ

カヤツリグサ科の植物は世界中の熱帯から温帯にかけて分布し、約50属4000種が知られている。「カヤツリグサ」の名前は、その三角形の茎を裂いて、ちょうど蚊帳を吊ったようなかたちの四角い骨組みを作る「蚊帳吊り草遊び」に由来するという。大きい種類では高さ2メートルにも達し、真っ直ぐで節のない茎は、ゴザやむしろの材料のほか、かごや菅笠（すげがさ）を編むためにも用いられてきた。写真は、プー・モーの果序。学名：*Actinoscirpus grossus*（L.f.）Goetgh.&D.A.Simpson